
H a p p y ? b i r t h d a y

hamy

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Happy? birthday

【コード】

N9432Z

【作者名】

hamy

【あらすじ】

Happy birthday

ある誕生日会前日の、高校生たちの話。

原案（前書き）

原案は昔、我が演劇部の公演用に書きあげたものです。結局ボツになりましたが。その原案をもとに、登場人物たちでアフター&ビフォア&アナザーすとーリーを書いていけたらな、なんて。だいたい一時間劇ですたぶん。なごんでくだされば、さいわいで

原案

Happy? Birthday

塚本由奈 tukamoto yuna

塚本夕貴 tukamoto yuki 由奈の姉

黒田翔也 kuroda syouya 由奈と同級生

麻川陽菜 asakawa hina "

平井葉月 hirai haduki "

野山夏鈴 noyama karinn "

笹村恭司 sasamura kyouji 陽菜の従兄弟 同

学年

基本的に、男女入れ替え可です。一応高校生設定。

散らかった感じの部屋。テーブルの周りに座り込む4人
テーブルの上にはそれぞれコップが人数分。+ペットボトル
本棚がある方が良かったりする。

葉月「で？」目線全体

陽菜「で、」目線翔也

翔也「なんで俺に振るんだよ」

陽菜「隣に居やがったから」

葉月「間違っちゃいないね」

翔也「…ってか、俺だけのせいじゃないだろ」

葉月「それをいっちゃ、おしまいでしょ…」

陽菜「その流れ、昨日やめようって言わなかったっけ？」

葉月「あ、確かに！八八八はは」

夏鈴「春休み始まる前から言っています。」

葉月「はは、あー、そうかもねー、あはははは」バタン

翔也「それ、昨日もやっただろ」

夏鈴「黒田くんに至っては突っ込みが毎回同じになってきていますね。」

翔也「う、うるせえ、こっちだって頑張ってるんだよ、きつと、きつとさあ」

陽菜「ま、翔也には期待はしてねーよ」

翔也「へいへい」

葉月「つて、もう8時じゃん帰ろつと」さつと起き上がって

夏鈴「野山さん、明日が当日って分かってますか？」

葉月「あ、なんか言った？夏鈴」聞いてないふり

翔也「何にもいってない、ずーと黙ってたはず」

陽菜「あ、葉月うちの時計1時間遅れてるから」

葉月「はっ！？」

翔也「直せよ」

陽菜「めんどいんだよ」

葉月「……ってことはかれこれ2時間もこんな感じでだらだらしてたってこと！？」

陽菜「誰かさんが『あ、あたしこれから塾だから』なんてことがなきゃ、あと2時間は早く集まれたのにねえ」

葉月「ひどいひどい、陽菜が冷たいよお」夏鈴に抱きつく

夏鈴「麻川さんは正しいことを言っていると思いませんか？」

葉月「夏鈴まで……そうやって、あたしを苛めるんだ、みんな、みんな……」

翔也「あーあ、葉月が落ち込みモードに入った」

陽菜「ほっとけほっとけ、どーせ2秒で治る」

翔也「そーか？」

葉月「何よ、もう陽菜になんかかまってあげない」ぷいっ

夏鈴「…ほんとに2秒で起きた」葉月、部屋に散らばってる本とかを端の方で読んだり

陽菜「ね？言った通りっしょ」

4人「……………」気まずい沈黙

夏鈴「まず、企画自体に不備があると思いますが…塚本さんだったら」

葉月「ね、ねえここにいてもさ、なんも変わんないし」夏鈴のセリフを食う

翔也「そうだな、うん、とりあえずどっか行ってみれば変わるかも知れないな」

葉月「じゃ、行こう！」

翔也「おお」下手へはけ

2人「……………」陽菜はそこらへんの雑誌に手を出す。

夏鈴「…麻川さんは行かないんですか？」

陽菜「めんどい、あとロクなことにならないのが見えてる」

夏鈴「確かに」

陽菜「夏鈴は行かないわけ？」

夏鈴「私は…まあ、あの二人に水を差そうとは思いませんから」

陽菜「ま、仲いいからね」興味ない、という具合に

夏鈴「いつでも一緒、って感じですよね…ここんところ特に」

陽菜「あ、その飲み物取ってくれない？」

夏鈴「あ、はい」

陽菜「…ほんと、小学生みたいだよな」

夏鈴「あの二人が、ですか？」

陽菜「この企画提案したのも奴らだし」

夏鈴「熱意は分りますけど…誕生日会なんて、子供っぽいんじゃない」

陽菜「しっかも、これだしな」机の下あたりから折り紙の輪っかを
取り出しながら

陽菜「…一生懸命なのはいいけど」

夏鈴「でも、塚本さんさえ楽しいと思ってくれば」

陽菜「……由奈ね」

夏鈴「どうかしたんですか？」

陽菜「大喧嘩した後から口聞いてないな と思って」

夏鈴「え、あの件はもう解決したんじゃない」

陽菜「いや？まったく」これまた他人事のように

夏鈴「まったく、じゃないですよ…ああ、通りである二人が普段よ
り一緒にいるんですね」

陽菜「え、なんで」

夏鈴「（溜息）同じグループの4人中2人が喧嘩中、それでもって
どっちかに話しかければ状況が余計悪くなるのは必至」

陽菜「そんなことないだろ？どうして」夏鈴のセリフにかぶる

夏鈴「あなたと塚本さんならそうなるだろうと誰もが考えます！！」

陽菜にかぶる

陽菜「…んなこと言われてもなあ」恭司下手から入ってくる

夏鈴「だいたいあんな前の喧嘩をまだ……？」気づく

恭司「……こんちわ」恭司 本探す、で夏鈴に気づいて挨拶

夏鈴「あ、は、はい」また探し始める、で見つけた

陽菜「あ、それはだめ」

恭司「…ケチ」また探し始める

夏鈴「（小声）…ど、どちら様？」

陽菜「笹村恭司、一応従兄弟」

夏鈴「あ、ああなるほど」

陽菜「実家が遠いからうちに居候してやがる…まあ高校は違つんだ
けどね」

恭司「…うるさい」

夏鈴「あの、麻川さんの同級生で野山夏鈴と言います」

恭司「……よろしく」で、また探す作業に戻る

夏鈴「（小声）……おいくつで？」

陽菜「一緒だよ、ま、無口なせいで大人びて見えたりもするらしいけど」

夏鈴「上級生に見えた……ここはキャストに合わせて変えても

陽菜「ま、気にしないでいいよ」

夏鈴「あ、はい」

3人「……」恭司は本探し、陽菜は雑誌を読み、夏鈴が気まずそうに。携帯でも見ながら

夏鈴「あ、やっぱり私平井さんたちのところ行ってきます」メール
発見

陽菜「え？でもどこ行ったかわかんないじゃん」

夏鈴「メール来てました……駅前の百貨で飾り付け探してるって」

陽菜「まだ飾り付けて段階じゃないでしょ」

夏鈴「ですよね」

陽菜「……じゃ待ってるよ」

夏鈴「行かないんですか？」

陽菜「だから、奴らの騒動に巻き込まれたくない」

夏鈴「はいはい」下手にはける

恭司「……あ、言うの忘れてたけど」

陽菜「なに？」

恭司「……あの借りてたマンガの第9巻」

陽菜「……ああ、あれが？」

恭司「……友達に貸したら」

陽菜「貸したら、「何気なしに、聞き流す感じで

恭司「先生に没収されてた」

陽菜「ふーん……って、ええ！？」

恭司「……いきなり大声出すなよ、うるさい」

陽菜「だって、あれどれだけ頑張って全巻集めたか知ってるの！？」

恭司「……悪かった、ごめん」探すのをやめて立ち上がる

陽菜「今すぐ取り換えして、今すぐに」勢いで押す感じ
恭司「…無理だよ」

陽菜「じゃ、買ってきて」

恭司「…なんで俺が」

陽菜「どーでもいいから買ってきなさい!!」どーんと、部屋の外に押す

陽菜「……………あ、ついでに飲み物も買ってきてもらえばよかった」
空のペットボトル

陽菜「ま、いつか」体勢を立て直してまた雑誌なんかを読み始める。

陽菜「……………」それなりの間がほしいですb 少し雑誌を片付けながら

陽菜「…やっぱり行こうかな、」

暗転 幕前にライト うす暗い夜の街中みたいな感じで

話してる間に机とかをはけちゃってください

幕前下手から由奈と夕貴

由奈「…ねえ」

夕貴「ん?」イヤホンを付けてる

由奈「さつきから聞いているの?」

夕貴「聞いているよ、新しいコートが買いたいんでしょう?」外しながら

由奈「聞こえてるんだったら」

夕貴「だめ、この間結構高いワンピース買ったばかりです」

由奈「姉ちゃんのケチ」

夕貴「なんと言われようと駄目なものは駄目でしょう?」

由奈「……………だろうと思ったけど」そっぽを向いて

夕貴「分ってるんだったら我慢しなさい」またイヤホンをつけようとする

由奈「…ねえ、姉ちゃん」ショーウィンドを眺めながら

夕貴「スニーカーも駄目よ」

由奈「…分ってます！もう」先に上手にはける

夕貴「まったく」イヤホンをつけて歩きだす

照明フェードアウトで暗転

明転

BGMもIN駅前の百貨店

フューディングで

葉月「…やっぱり、これはないと思う」真中らへんで客席に背を向けてごそごそと

翔也「いいと思ったんだけどなあ」

葉月「だってさ…季節考えようよ、季節 今3月末だよ？もう桜咲きかけてるんだよ？」

翔也「だけどさあ」

葉月「あたしは却下、やりたいなら一人で勝手にやりなさい！」

翔也「え、やっていいの？サントとトナカイ」

葉月「前言撤回…やるなっ！」

翔也「…だめかあ」上手から夏鈴駆け込み

夏鈴「あ、いたいた」

翔也「お、夏鈴遅かったな」

夏鈴「黒田君たちが百貨にいたると言ったのに、百貨店になんているからです。」

葉月「え、百貨店つて送ったと…あ」ケータイを取り出しながら

翔也「…おい」覗き込む

葉月「アハハ、打ち間違えちゃった」

夏鈴「どうやってたら、百均と百貨店打ち間違えるんですか!？」
翔也「ま、終わったことはよしとして」

夏鈴「…あの、私のためだけに何分も歩きまわったんですか？」

葉月「いい運動になったんじゃない？（小声）最近ダイエット食に手を出し始めたでしょ」

夏鈴「な、なぜそれを」

葉月「しかも去年の服が着られなくなったから、らしいじゃない」

夏鈴「なっ」なにを言って

葉月「葉月様の情報網なめんじゃないよ」

葉月「大丈夫、こいつにや黙っておく……あ「こいつ」翔也 目が合う」

2人「…」しばらくフリーズ

翔也「悪いけど、全部聞こえてるから」たなに目を戻す

葉月「忘れる、今すぐ一生のお願いだから」

翔也「命令口調で一生のお願いされてもなあ……」

葉月「う…お、お願いします、黒田様っ」背後から夏鈴の威圧的才
ーラ

翔也「やだ」

葉月「は？」

翔也「一生のお願い、使われるの8回目だから」

葉月「な、なにそれ…」

夏鈴「自分が悪いんですよ？」

翔也「どうせ、由奈問い詰めて聞いてんだろ」

葉月「うん、だって由奈ちよっと脅せばすらすら喋ってくれるし、

夏鈴の相談相手によくなってるし…って……」

夏鈴「へえ、そうなんですかあ？」

葉月「って言えって翔也に言われたあ」夏鈴に泣きつこうとする

翔也「葉月…無駄だぞ、もう」が、泣きつこうとした葉月の手首を
をぱつととる葉月

夏鈴「麻川さん……覚悟はよろしいですか？」威圧感のある笑み

葉月「ちょ、か、夏鈴怖いって、夏鈴!？」じりじり退く感じで
翔也「つたく、こいつらは」葉月にぶつかりそうになりよける…と、
下手の方に目が行く

翔也「葉月、あれって…」

葉月「あれ?」

翔也「ほら、あの白い人」

葉月「あ、あれはっ」夏鈴を振り切ってダッシュ

翔也「夕貴さん!」手を振りながら?こちらも駆け足

夏鈴「……………」振りはらわれた手をみて軽く茫然

夏鈴「…誰?」取り残された感

暗転、BGMは流しっぱなしで

その間にテーブル本棚等セット

明転、陽菜の部屋に恭司が1人、寝っころがってマンガでも読んで
てください

明転と共にBGMは下げる

葉月「陽菜?」…ってなに、誰もいな「い、のあたりでつまづく

葉月「いたた…って、恭司いたの!?!」

恭司「……………いたら悪いか?」

葉月「いや、そんなこと言ってない…(独り言)あ、いいこと考え
た」

恭司「……………陽菜、知らないか?」

葉月「へ、陽菜?いや、あたしはここにいるもんだと思ってたから

恭司「…俺にマンガ買いに行かせといて」

葉月「なに、陽菜にパシられたの?」

恭司「……………まあそんなもんだ」下手から翔也

翔也「おい、早く…おお、恭司じゃねーか」

恭司「……厄介な奴が来た」

翔也「そんな邪魔者扱いすんなよー」

葉月「…はたから見たら仲がいいように見えるけど」

恭司「……付きまとうな、邪魔だ」

翔也「いいじゃんか、おつそれ、俺も好きだぜ？ただ主人公がな…」

それ〓本

葉月「ただの嫌がらせだね、ありゃ」座り込んで2人の言い合いが収まるのを待つ

翔也「…ただ、やっぱり終わりが一番気に食わない、なってないんだよ、ありゃ」

恭司「…気に言ってるんだが、その部分」このあたりで葉月、携帯をいじる

翔也「え？ああ、わりいわりい」

恭司「……分かったならいい」

翔也「でも、やっぱりここ、このシーンがいいよなあ」

恭司「…おまえ、推理シーン以外で好きな部分とかないのか？」

翔也「え？」

恭司「……翔也が気にしているシーンなんて大抵、推理シーンじゃないか」

翔也「…確かにそんな気が」

葉月「翔也も読んでるとしたら推理小説だしね」

翔也「そうか？」

恭司「……俺は怪談ものの方が好きだな」

翔也「俺は苦手だね、なんというか…」

葉月「こわいだけでしょ」

翔也「そ、そんなことない ちよつと非科学的なことが苦手なだけだ！」

葉月「それをこわいって言うの」

恭司「……小学生のころだって、ただの肝試しで怖がってたじゃないか」

翔也「そ、それは……」

葉月「あれ、恭司よく覚えてるねそんな昔のこと」

恭司「…確かに、よっぽど葉月の影で怯えてた翔也が印象深かったんだろうな」

翔也「……なんでお前ら余計なことばっか覚えてるんだよ」

葉月「いいじゃん、面白いし」

翔也「俺は面白くない!」

恭司「……そっぴやあの頃、翔也探偵になるって言って聞かなかつたよな」

葉月「あ、言つてた言つてた それであたしら探偵ごっこらしきものに付き合わされて」

翔也「?そんなことあつたか?」

葉月「なんで当の本人が忘れてるんだか……」

恭司「…なぜか木から飛び降りたり、団地で走り回って怒鳴られたり」

翔也「あー、そう言えばそんなこともあつたよな無かつたよな」

葉月「あたしなんか毎回助手役か警察役…しかも毎回役立たず」

恭司「…俺なんか犯人役に仕立て上げられて大変だつたんだから」

葉月「ま、最後には陽菜と由奈が乱入してきて終わるんだけどね、毎回」はつと気づく

3人「………」恭司は普通に、葉月と翔也はちよつと気まずく

葉月「…いいよね?」

翔也「うん、その方がいいと思う」

恭司「?」

葉月「ね、恭司」

恭司「…なんだ?」

翔也「ちよつと来てくれないか?」

恭司「どこへ」

翔也「行けば分かる」手を引つ張る

恭司「…でも俺、陽菜帰ってくるの待たないと」

葉月「いいから、陽菜にはさっき連絡したの」
恭司「は？」
翔也「問答無用、行くぜ」引っ張って下手へ
恭司「え、あ、ちよっと」引っ張られて下手へ
葉月「早く」後ろから押して、続いてはける

暗転

再び幕前、駅前の商店街 ベンチを上手寄りの奥に
その間に後ろの本棚をはけるor位置を変えて
散らかってた本は片付けてください

陽菜「何よ、百均にはいないし」下手から

陽菜「隣の百貨店は10時までだから、さっき閉まっちゃったし」
石蹴る感じでいじけて

陽菜「どこいったんだよ、あいつら」出来れば通行人を数人

陽菜「……やっぱ家で待ってた方が良かったかな」ゆっくり歩いて
ベンチへ

陽菜「……」暇そうにあたりを眺める

由奈「……」姉ちゃんどこ行っちゃったんだろ「上手側から、お
互い気づかない

由奈「確かにあたしがわがまま言っちゃったけど」下手側手前で立
ち止まる

由奈「欲しいものだってそりゃあるし」あたりを軽く見まわす感じで
由奈「それに…姉ちゃんが隠れてブランド物のバック買ってるのも、
知ってるし」

由奈「…」しばらくあたりを見回す、ここらあたりで通行人がいな
くなる

陽菜「……あいつら、由奈の家に？」

由奈「やっぱり……もう一度あのお店さがして来ようかな……？」

陽菜「……行くしかないか」

由奈「……」メールチェック

同時に陽奈は下手へ由奈は上手へ軽く走り気味に、真中ですれ違つたと尚良かったり。お互い気づかずそのままはける

暗転、

明転、由奈の家

夏鈴「お邪魔しまーす」上手から

葉月「いつ来ても、綺麗だよね」

翔也「お前の家がやばいんだろ」

葉月「仕方ないじゃん、兄弟多いんだから」

夏鈴「あれ、平井さん兄弟いましたっけ？」

葉月「ああ、兄貴が3人」

翔也「いいじゃんか、俺のとなんて」

葉月「えー、可愛いじゃん翔也の妹」

翔也「外ではおとなしくしてるだけだよ、うちの中じゃ酷いのなんの」

夏鈴「……私は一人っ子だからなあ」

葉月「でも、それにしても」

夏鈴「塚本さんはうらやましいですね」

翔也「……まあな」

夕貴「みんな、ジュース何がいい？」声のみ、下手から

葉月「じゃ、あたしアップル！」

翔也「俺も」

夏鈴「え、じゃあ私もアップルで」

夕貴「分った、じゃあ少し待っててね」

夏鈴「……ホント、羨ましい」

翔也「俺の妹に見習わせたいな」

葉月「あたしも、夕貴さんみたいなお姉さんがほしかった!」

翔也「…もう10時過ぎなのに事情を話したら“いいよ、上がって”だもんな」

夏鈴「しかもあの優しい微笑み…」

葉月「由奈と変わりたーい」

夏鈴「ですね」

翔也「…って由奈が帰ってきちゃ駄目なんじゃないのか?」

夕貴「ああ、その点は大丈夫よ」

葉月「夕貴さん!」

夏鈴「あ、ありがとうございます。」

翔也「どうも」

葉月「…で、大丈夫って?」一口飲んでから

夕貴「由奈はきつと商店街を私を探して歩き回ってるから」

夏鈴「え?」

夕貴「見つけたら新しいスニーカーをかってあげてもいいって言うておいたの、メールで」

翔也「ああ…かわいそうに由奈」

夏鈴「きつと目の色変えて探しているでしょうね」

葉月「…でも、気づいて戻ってきちゃったらどうするんですか?」

夕貴「大丈夫、由奈にはカギを持たせてないから」にこ

翔也「あーあ、」由奈に同情

夕貴「たとえ帰ってきたとしても、準備が終わるまでは一歩たりとも家には入れさせないわ」きりつとそれでいて笑顔で

葉月「かつこいいい…」

夏鈴「…はい、」

翔也「は!?!」

夕貴「だから安心して誕生日パーティーの準備をしてくれてかまわ

ないのよ」

2人「はいっ」

翔也「あ、はい」

夕貴「あ、お菓子食べたいものある？持ってくるわよ」

夏鈴「え、いえこんな夜中に上がりこんで、お菓子なんか」

葉月「そうですよ」

夕貴「いいのいいの、取ってくるから」下手へ、

葉月「あ、夕貴さ……」いっちゃった

夏鈴「…やっぱり、優しい人ですね」

葉月「うん」

翔也「……俺には妹をいじめて楽しもうとしてるようには見えなかったけど……」

葉月「せっかく会場をわざわざ貸してくれてるんだから、準備しなくちゃね」

夏鈴「ですね」

翔也「あれ、買った材料は？」

夏鈴「え？」

葉月「ああ、だいじょうぶ大丈夫」

恭司「……なんで俺に荷物持たせるんだよ」上手からビニール袋持たされて

葉月「いいじゃん、サッカー部でしょ？」

夏鈴「いや、平井さんそれは関係ないと思う」

翔也「うん」

葉月「ええっと……早速」恭司から奪い取ってがさごそあさり始める
恭司「…聞いてないし」

翔也「おっ、早速これ出そうぜ」なにやらがさごそと

葉月「これは？」クラッカーを取り出す、もちろん鳴らしません

翔也「それより、これは？」

夏鈴「そんなことより、明日なのだからもっとやることがあるのでは……」

陽菜「…えと…こんちわ」恐る恐るといふ感じで声だけ上手から
葉月「あ、やっと来た」たちあがって上手へダッシュ
葉月「ちよっと、陽菜なんで逃げんのよ」
陽菜「い、いやなんとなく」
葉月「せつかく来たんだから」残り3人はがさごそ袋の中身をあさ
つてくれれば
陽菜「ま、確かにそうだけど」ここまで2人は声のみ
葉月「手伝ってよっ」と、陽菜を引っ張ってくる。
陽菜「あ、あのなあ」
翔也「遅い」
夏鈴「迷ってたんですか？」
恭司「…よ、」
陽菜「……………あれ、由奈はいないの？」
夏鈴「塚本さんは呼べませんよ、さすがに」
翔也「本人いる中では準備なんてできねえよ」
陽菜「いやね、由奈の家でやるって言うからってつきり…」
葉月「そうそう、でもねとっておきの助っ人に頼んだから大丈夫」
陽菜「…ってことは、やっぱり夕貴さん!？」
恭司「……………そういや、姉貴みたいに慕ってるもんな陽菜」
翔也「ほんっと、嬉しそうにするな」
夏鈴「じゃあ、呼んできますよ」下手へ向かう
陽菜「あたしも行くっ」夏鈴を抜かす勢いで
葉月「じゃ、あたしも」夏鈴と
2人「……………」
翔也「そういや、恭司と夕貴さんって面識あったっけ？」
恭司「……………一応、な」
翔也「でもあんまりないだろ」
恭司「…あの人、サッカー部のOBだからたまに来るんだ」
翔也「へえ、マネージャー？」
恭司「……………ああ、でもかなり上手らしい」

翔也「あの夕貴さんがサッカーか」

恭司「…先輩たちはかなりしごかれたって言ってた」兄になった場合に変更いれます

翔也「…：だろうな」先ほどの由奈の一件を思い出す。

恭司「陽菜はよく自分の姉みたいに自慢してきたな」

翔也「しかも今は美大に行ってるんだろ？」

恭司「ああ」

翔也「そりゃ自慢したくなるな」

翔也「…：で、由奈と喧嘩したのが原因でここに来れなくなったから」

恭司「…：久しぶりなんだろうな、やつぱり」

翔也「あんな嬉しそうな顔…：久しぶりに見た」

恭司「どうせ、今回のこれもあいつらを仲直りさせるのが目的なんだろっ？」

翔也「…：まあそれもあるけどな」

恭司「…：それも？」

翔也「…：葉月もさ、ここんとこ落ち込んじゃまって」

恭司「だろっな」

翔也「…：あの二人の喧嘩の原因、実は葉月らしいんだ」

恭司「ああ、そうだろっな…：ってそうなのか？」

翔也「聞き流してんじゃねえよ」呆れた感じで

恭司「…：いや、聞いてた。ちゃんと聞いてたぞ」

翔也「嘘つけ、お前の嘘はすぐ見破れんだよ」

恭司「…：…：」聞いてないふり

翔也「…：ったく…：葉月、かなり責任感じてんだ」

恭司「もとから一人で抱え込むタイプだからな」

翔也「その葉月が俺に相談を持ちかけたんだ」

恭司「（小声）…：翔也なんか相談持ち込むなんて、相当切羽詰まってるんだな」

翔也「おい、聞こえてんぞ」

恭司「…：」口笛とかで誤魔化す

翔也「（溜息）、なのに葉月の奴…陽菜と由奈の前では強がりやが
つて」

恭司「…お前もだろ」

翔也「は？」

恭司「…負けず嫌いで意地っ張りでいつも自分のペースに人を巻
き込んでたのはお前だろ？」

翔也「だからどうした」

恭司「大抵こういうとき、一番最後まで意地はってんのはお前だよ」

翔也「そんなこと」

恭司「……………分つてねえな」

翔也「なにが」剥きになる感じで

恭司「喧嘩起こすのは大抵、陽菜と由奈…で葉月がカバーしようと
しても出来ずだいたいお前に回ってくる……………それを俺が一線引いて
眺める」

翔也「…確かにそう、だけどいつもは勝手に仲直りさ」

恭司「俺は人の喧嘩には手を出さない主義なんだ」

翔也「主義つて何だよ主義つて」

恭司「……………きつとあの野山夏鈴とかいう奴が俺のポジションなんだ
ろ？」

翔也「…ま、まあ確かに近いものはあるな」下手から夏鈴

翔也「つて噂をすれば影かよ」

夏鈴「え？」

翔也「い、いやなんでもねえ」

夏鈴「はあ…また平井さんと麻川さんが言い合い始めたんで逃げて
きたんです」

翔也「ああ、またか」

夏鈴「そのうち夕貴さんが止めてくれそうだったんで」

恭司「…2人の身を案じておくか」

夏鈴「人の喧嘩にかかわっても口クなことありませんし」

翔也「（小声）やっぱり」

恭司「やっぱりか」

夏鈴「え？何がですか？」

翔也「いやいやいや、なんでもない、話し戻そうか」

夏鈴「なんの話してたんですか？」翔也がサイレントで説明

恭司「……………一度だけ、他人の喧嘩に首突っ込んだことがある」

翔也「お前が？」

恭司「（頷いて）あれは…俺がお前の探偵ごっこに付き合わされて」

翔也「ああ、さっきの話か」

恭司「……………お前になぜか後ろ手に縄を結ばれて、動けなくなってたところにだ」

夏鈴「そんなことやってたんですか？」

翔也「…それは過去の俺に聞かないと分らないな」

恭司「ちょうど陽菜と由奈が今にも喧嘩しそうな情景にぶつかった」

夏鈴「それは、いつものことでは？」

翔也「ああ」

恭司「そうだろ？……………だけど…無性にいらついていた俺はこれ以上厄介事が起こるのが嫌だった」

夏鈴「いらつかせてたのは黒田くんってことでいいんですよね」

翔也「…お前な」

恭司「それで両手が使えない状況のくせにあいつらの喧嘩に割って入った」

翔也「待て恭司…それっていくつの時だ？」

恭司「小4、あいつらが一番荒れてた時期だ」

夏鈴「荒れてたって…」

翔也「今となつてはさすがに口喧嘩だけだけど…一時期、な」

恭司「……………そこで俺はぼろぼろにされたってわけだ」

夏鈴「まあ一番の原因は黒田君と考えればいいわけですね」

翔也「おいおい」

恭司「まあ確かにそうだが」

翔也「おいっ」

恭司「……………泣いてたんだよ、あの二人」

翔也「え？」

恭司「喧嘩が終わって、団地の管理人に見つかって逃げてた時」

夏鈴「……………だからなんですか？」

恭司「俺が変に手をだした、結局あんな結果になっちまって」

翔也「…あいつら、他人に手を出すのは極度に嫌う癖に」

恭司「…その直後の1週間はきつかった…話しかけられるわけなかったしな」

夏鈴「……………それ以来？」

恭司「ああ、その…なんだ、トラウマ染みてて」

翔也「…あんまい経験じゃないもんな、人泣かすなんて」

夏鈴「黒田君は泣かすより泣かされる方が多そうですけど」

翔也「お前な…あと恭司も頷くな」

恭司「……………だから他人の喧嘩に口は出さない」

翔也「…その方がいいのか？葉月が提案したこの企画は」

夏鈴「そういう意味じゃない…ですよね？」恭司に、頷く

恭司「このまま長引かれるのもこまる…確かに無理やり連れてこられた節あるけどあるけど…俺がごめんなのはこれ以上気まずい思いをすることだ」

夏鈴「え、無理やりつれてこられたんですか!？」

翔也「しょ、しょうがないだろ、なんかそう言う雰囲気だったんだよ」

夏鈴「私…そんな人だと思ってなかった、黒田君のこと……………」

翔也「あ、あのなあ、誤解だって誤解」

恭司「……………今知つといてよかっただろ？」

夏鈴「はい、以後注意しておきます」

翔也「…お、お前ら……………あれ、俺ってこんなキャラだっけ、こんなキャラだったけ？」

下手から3人葉月と陽菜はうなだれてる感じで

夕貴「ごめんね、お菓子持ってこようとしたらあいにく無くなって」

夏鈴「いや、いいですよ、ただでさえご迷惑かけているのに」

翔也「（小声で）ほら、口喧嘩なんてするからそうなんだよ」葉月に
葉月「…だって、陽菜が…」

陽菜「あんたが勝手に台所のケーキ食べようとするから」

夏鈴「…：ケーキ？」

恭司「ああ爆弾に手をつけたみたいだな」

翔也「ケーキ？、俺の分のケーキ食べたのか!？」

陽菜「いや、あんたのじゃないから」

葉月「た、ただ冷蔵庫の中の隠し扉的などところに入ってただけだから」

恭司「…一番取ってはいけないところから取ったな…」

翔也「よし、葉月今すぐその場所に案内しろ、残りのケーキは全部
俺が」夕貴さんの笑み

3人「いえ、なんでもないですっ」

夕貴「…：……ごめんね、あの子頑固だから」

夏鈴「そんな」

恭司「…：そんなことないですよ」

夕貴「あら、恭司じゃない、いつからいたの？」

恭司「さつき、荷物持ちにされてたんで少し遅れて」

翔也「（小声）気づかれてなかったってお前影薄いんじゃ」殺気、
翔也退く

葉月「…：由奈が特別悪いわけじゃないですよ！」

翔也「うん…：でも珍しいよな由奈がここまで意地はるのは」

恭司「…：…何やったんだよ」

陽菜「別に大したことじゃ」

葉月「あたしなんですよ、あたしが原因」

翔也「おい、葉月」

恭司「…：翔也」引き留める、夏鈴も頷く 陽菜はずっとそっぽ向い
てる感じで

葉月「…：確かに陽菜の言うとおり大したことじゃないのは事実、

きっかけはただ下校の時に」

陽菜「…だから、言うまでのことじゃ」

葉月「アタシは2人共待たずに帰った、…たまにはいいよねって違う友達と」

夏鈴「…それが大きな亀裂に？」

陽菜「喧嘩って言うほどでもないよ、ほんとに些細なこと」

葉月「そのあと、陽菜と由奈はお互いに勘違いして帰った…もう一人がアタシを連れて勝手に帰ったって」

陽菜「だからっ…誤解はすぐ解けたって」

恭司「…でも2人の溝は埋まらなかった」

陽菜「……………」

葉月「知ってるんだよ？2人が次の日から話さなくなったの」

陽菜「…でも…ただ、お互いすれ違っただけ、謝ったし誤解も解けた、なんの問題もない」

翔也「ただ、そうやって出来た溝が一番深いからな…」

夕貴「ねえ、あなたはどう思うの？由奈」少し間にかばんを落とす音、でまた間を空けて

葉月「え？」

翔也「は？」

夏鈴「へ？」

恭司「…？」4人同時に

陽菜「……やっぱりね」ちよつと遅れて

夕貴「いい加減、出て来たらどう？」

由奈「……………」無言で上手から

葉月「…由奈」

陽菜「……………」

翔也「いつから」

夕貴「この話になったところから…そうでしょ？」

由奈「……………」頷く

葉月「…由奈…あたし、本当にゴメン」

陽菜「ごめん！」葉月より大きめな声で

恭司「……………陽菜？」

陽菜「…いい気になっていたんだ、あたし」

由奈「…………？」

陽菜「いつも、いつだって勝負ごとではあたしが勝っていた。…っ
ていつても大した差は無かったけど。それなのにここ最近立って続
けに由奈に負けた…ただそれだけの理由で、いい気になっていたあ
たしはいらいらしていた。」

葉月「でも、あれまではいつも通りで」

陽菜「隠してたんだよ、無理やり自分の気持ちを。いろいろ壊した
なくって、他人まで巻き込むのは…………お互い嫌だったから」由奈、
無言で頷く

陽菜「なのに、なににあたしさ…葉月も由奈が連れて行ったと思っ
て」

夏鈴「でも実際は違ったんじゃない…」

陽菜「でも…結局由奈の方が周りの人からは好かれていて…それを
間近で見えてきつと我慢できなくなったんだと思う。確かにきっかけ
はあの出来事…………でも引き起こしたのは自分の器の小ささ」

恭司「…………それが原因だと」

陽菜「そう、なのに…………自分勝手に、いい気になっていたのはあた
しの方…………由奈、喧嘩するたびにいつも謝るのはあんただった、あ
たしからなんて一度も」

陽菜「ほんと…………ごめん、なさい」

由奈「……………陽菜」

陽菜「…なに？」

由奈「陽菜の馬鹿！どうして言うてくれなかったの？あたしだって
そんな気持ちでずつともやもやしてて、でも陽菜に言おうにも会い
づらくって、しんどくって、でもなぜか意地はって会いに行こうと
してる自分の気持ち抑え込んで…」勢いで陽菜に飛びついちゃうぐ
らいの感じでw

陽菜「ゆ、由奈？」

由奈「でも結局いろいろ失くしたくないからそんな行動に出てるって気づいて、でもこんなことしてたら……大事な親友を失ってしまつて、やっと、やっと気付いた。ごめん、ホントに……あたし」

陽菜「…何よ、そんなこと？」

由奈「え？」

陽菜「分ったじゃん、結局はお互いおんなじこと考えてて…結局はいつもの喧嘩と一緒に……前に言ってたよね、夏鈴」

夏鈴「え、私ですか？」

陽菜「あたしと由奈が喧嘩するのは、おなじようなこと考えてるからって…似たもの同士で喧嘩するほど仲が良いって」

夏鈴「…確かに、言いました…だって事実そうじゃないですか？」

葉月「そうだね、いつもいつも喧嘩ばかりしてるくせに」

翔也「妙なとこ息ぴつたりで」

恭司「…性格はむしろ正反対に近いと思うけどな」

陽菜「ちよつと恭司、どれどつという意味？」

恭司「いや、別に悪い意味で使ったわけじゃないんだが…」

葉月「まあまあ、恭司の言ってること事実なんだし？」

由奈「そうね、うん、確かに間違つてはない」

翔也「由奈、夕貴さん似なところもあるからな」

夏鈴「えつと…黒田君、地雷踏んだ」

翔也「え？」

陽菜「翔也……それはどつという意味かな？」

翔也「わ、そそれはその…」

由奈「あ、そう言えば」いきなり上手へ

陽菜「ん？」

恭司「…どつした」

由奈「すっかり忘れてた…はい、姉ちゃんこれ」大きめのビニール袋にお菓子

夕貴「ありがとう」

翔也「は？」

葉月「なんで由奈、お菓子買ってきたの？」

由奈「姉ちゃんに頼まれて、だから絶対スニーカー買ってよね」

夕貴「そうね…考えといてあげる」

由奈「なにそれ！あたし騙されて走らさせられた拳句にそれまで買わされたってこと！？」

夕貴「いいじゃない、良い運動になったでしょ？」

由奈「よくないっ、人がわざわざ探してたのに先に帰るなんて…」

夕貴「でも帰ってきて、って言ったらすぐに帰ってきてくれたじゃない」

由奈「そ、それはだって…」後ろでサイレントで言い合い…というか由奈が一方的に

翔也「…ってことは」

葉月「由奈をこの場に呼んだのは」

陽菜「夕貴さん！？」

恭司「…ということのようだな」夕貴さん微笑み

夏鈴「…カッコいい…」

由奈「もう姉ちゃんなんかしらないっ」そっぽを向いて拗ねる

夕貴「ちよつと、由奈？」無視、というか話しかけられても逆の方向を向く

恭司「…何やってんだか」

葉月「やっと落ち着いたと思ったのに」

夏鈴「まあ、それでこそ由奈ですから」

夕貴「そうね」

葉月「…あ、もう日付越してる」

陽菜「…は？」

翔也「え、嘘、俺らそんな時間まで騒いでたわけ！？」

夏鈴「す、すいませんっこんな遅くまで居座ってしまっ、い、今すぐ帰りますんで」夕貴に「こゝらで曲を入れたい…フェードイン夕貴「いいわよ、久しぶりに賑やかなのも…由奈が小学生の時以来

かしら」

恭司「……でも、高校生が出歩いて良い時間でもないですし」

翔也「じゃ、そろそろ帰りますよ俺ら」

夕貴「みんな家、近いでしょう？大丈夫よ」

葉月「さすがに、親に怒られちゃいますから」

夏鈴「あ……私、帰り道わからないかも」

陽菜「そっぴや夏鈴、家遠いもんな」

夕貴「あ、じゃあ送って行ってあげよつか？これでも免許持ってるから」

夏鈴「い、良いんですか!？」

葉月「（小声）……夕貴さん、車に乗ると性格変わるから気をつけてね」でも夕貴に夢中な夏鈴

翔也「聞こえてない、ね」

陽菜「まあ、あとで痛い目会つのは夏鈴だし?」

恭司「それはそうだ」

夏鈴「……素敵」

陽菜「それに、あれじゃ何言っても無駄でしょ?」

葉月「そうね」

陽菜「あ……由奈のやついつの間にか寝やがって」

夕貴「歩き回って疲れたのね」

翔也「（小声）……疲れさせたのって夕貴さんじゃ」

葉月「……翔也、あっちあっち」

翔也「へ?」夕貴さんと目が合う、曖昧に笑ってごまかす

夕貴「じゃあ、このお菓子はみんなに」

翔也「いや、それは良いです」

夕貴「え?いいのに」

葉月「そっぴやなくて」

夏鈴「明日の、誕生日会のために」

夕貴「そうね、それじゃ取っついておくわ」

恭司「……お願いします」

葉月「では…そろそろ」

陽菜「あ、…ひとつ重要なこと忘れてた」

夏鈴「ああ、そうですね」

葉月「危ないあぶない」

翔也「あ、そっか」

恭司「…俺ははじめから忘れてなんて」

翔也「嘘つけ」

毛布「なんかあつたら陽菜が掛けながら」

6人「happy・birthday、由奈」

f i n

2 0

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9432z/>

Happy? birthday

2011年12月29日15時49分発行